

PESの死と新生

「経歴全体を流れる一つの精神を、人間愛、自然愛として、地球環境につなげてきたのがPESの心髄」。石黒隆敏先生の思想とPESの仕事は、この言葉で言い尽くされていると思う。50年の活動が環境への視点で貫かれていること、環境を考えた建築を実現したことを示すこと。この点が記念誌を制作する目的だったと理解しているが、もし伝えることができたら、そして微力ながらそのお役に立てたとすれば、これ以上の喜びはない。

ご覧になって気づかれた方も少なからずいるのではないか。世界を俯瞰するような広い視野をもって活動してきたことについてである。2章の年表にある「歴史の証人、世界の動き」にあるように、いくつもの歴史の転換点を実際にその場で目撃してきた。まさに歴史の証人である。背景には、環境を考えるには、インターナショナルな視点と取組が必要だとの思いがあったと理解したい。設計などと対比させながら見ていただくと理解はさらに深まるはずである。

先生のパーソナリティは、寄稿した方々に譲り、ここでは二つのことにふれたい。一つは写真にある詩である。40歳となり日本青年会議所を卒業するときに贈られた。解説はあえてするまでもなく、先生の人柄を見事に表現した詩だと思う。もう一つ、いずれも節目の年のアメリカへの飛行機で、三度も同じ客室乗務員と一緒にいるなど、神がかり的な現実にも何度も遭遇してきた。奇跡の人と呼ぶにふさわしい何かを秘めているのではと思わずにはいられない。

先生に初めてお会いしたのは、2022年7月、暑い日のことだった。ユーモアの一方で、よどみない会話のスピードと次々に展開される話題にとてもついていけず、正直に打ち明けると、理解できたのは半分もなかった。その後、通い続けるうちに、独創的な発想と豊かな表現力に惹き込まれていき、先生の環境や設備に対する想いを紡ぐ言葉に感化されていった。愛読書は万葉秀歌、趣味の音楽関係、毛澤東選集など、建築以外の本が多く、発想の源になっていると推察する。

「優しさが私の欠点」「加減の大切さ（完璧を求めな）」「破壊は次の創造につながる」。印象深い石黒語録はいくつもあるが、中でも強く印象に残っているのは、「死ぬということを考えて生きてきた」という鮮烈な言葉である。これは「自分の後の世代に何を残すか」と同じ意味だと受け止めさせていただいた。今後は環境のこと、設備のこと、世界のことについて、伝道者としての先生が躍動するのではないだろうか。

